

優秀賞

手渡しは心の橋渡し

鳥取県 智頭中学校 三年
寺坂 叶絵

物を直接両手で渡すこと。そして、それを両手で受け取ること。そのやり取りの一つひとは、日常のたった一場面にすぎないけれど、その一つのやり取りを私は大切にしている。

私が小学校に通い出したある日、帰宅して宿題が終わったあと、学校からもらった手紙を母に渡したときだった。

「人に物を渡すときは、両手で物を持って渡すのよ。」

いつも明るく接してくれる母が、静かに、真剣に私に教えた。そのときの私は、こんなささいなことでも、大人は気にするのだなと軽く考えていた。

その翌日、先生からプリントを渡されるクラスメイトたちを見て、疑問を抱いた。誰ひとりとして「両手で受け取らない」のだ。昨日のお母さんの話は間違っているのか。なんで先生はみんなに注意しないのだ、と私は困惑した。

それからそのできごとを忘れ何年か経ち、あるとき、友達が私に手紙を渡し、こう言った。

「はい、どうぞ。」

たったそのひとことと、少しの笑みで渡してもらっただけだったのに、私は温かい気持ちに包まれた。また、私が、

「ありがとう。」

と、笑顔で言っただけなのに、その友達は笑顔になった。

そのことを、コロナ禍の今思い出し考える。今、私をふくめ世の中の人たちは、会話の中で温かさを感じられているのか、と。不安定で騒がしい、忙しい日々の中で、心の込もった少しの「まごころ」を忘れ去っていないか、と。

後ろを振り向かず、片手で渡す人。投げて渡す人。そんな渡し方はもってのほかだが、「丁寧さ」を求められていないときにも、両手で、さらにひとこと声をかけて渡すことが、私たちに必要なことで、大切なことだと思う。

自分の評価や印象のために丁寧な振る舞いをするのではなく、相手とのコミュニケーションのためにすることで、今のこのストレスがあふれる生活が、少し楽になると思う。

母がああとき注意したのは、常識だとか、世間体のためでなく、優しい生き方を教えるためなのかと、最近考える。そして私は、手渡しが一番のまごころだと思う。私が体験したあのできごとは、それを知れた私にとって、かけがえのない体験になった。

人は世の中であたりまえのことを身につけるから、ああとき先生が注意しなかったのは、まだ私たちには難しく、必要でない時期だったからかもしれない。ただ、あたりまえとして学んだことは、人にとって優先度の低いものに見えてしまうから、しっかりとその行為の本質を私たちは捉えるべきだと思う。

私はこれからの生活で、温かい文化をつくっていくために、少しの行動にも意味を見出して生活していきたい。そして、手渡しを通して、心の橋渡しとなるできごとに出会っていきたい。